



炭 櫃 (すみびつ)

炭を小出しに入れておく容器です。



十 能 (じゅうのう)

火のついた炭を入れて持ち運ぶ道具です。畳の上に置けるよう下部に木製の台を付けています。



火 消 壺 (ひけしつぼ)

燃えている炭を入れ、蓋をして空気を絶ち、火を消すための壺です。竈や囲炉裏の脇に置かれていました。



行 火 (あんか)

中に炭を入れて手足を温める暖房具です。火鉢と違い蓋がついているので、容器に直接触れたり布団をかけて使ったりしました。また炬燵こたつの熱源としても用いられました。



湯 湯 婆 (ゆたんぼ)

身体を温める道具で、中にお湯を入れ布で包んで用います。ブリキ製や陶器製の物が使われていましたが、近年エコロジカルな暖房具として人気が高まり、プラスチック製のものも作られています。



電気行火 (でんきあんか)

行火の熱源を電気に変えたもので、冬の寒いときに、湯たんぼのようにして布団の足下に入れて使います。

照明器具の移り変わり

人間は木や草を燃やし明かりとして利用してきました。囲炉裏には調理や暖房以外に照明として機能もありました。また、松の根は脂分が多く燃えやすいので、ひで鉢などの上で燃やして手元の明かりとしていました。

動物や植物からとった油を燃やし明かりとすることも古くから行われていました。最初は油を入れた皿を床に置いていましたが、やがて脚の上に皿を置いて広範囲を照らせるようにした灯台が作られました。室町時代には灯台に紙などの覆いをつけて持ち運びできるようにした^{あんどん}行灯が生まれ、江戸時代には室内照明として使われるようになりました。

^{ろうそく}蝋燭は仏教とともに中国から伝わったものです。蝋燭を立てる燭台は室町時代に使用されました。元々蝋燭はミツバチの巣に溜まる蜜蝋から作っていましたが、室町時代ころよりハゼやウルシの実から作られるようになりました。蝋燭は行灯より数倍明るいのですが高価だったので、冠婚葬祭などの特別な時や、^{がんどろ}提灯や強盗などの屋外携帯用に主に利用されました。明治時代になると蝋燭は石油から作られるようになり、安価なものとなりました。

幕末に西洋から石油ランプが入ってきました。これは今までにない明るさで、明治中期には国内で製造されるようになり急速に全国に広まっていきました。

このように私たちは昔から火を明かりとして利用してきました。しかし、大正から昭和にかけて一般家庭に電気が普及してくると、明かりは電灯へと移り変わっていきました。



ひ で 鉢 (ひでばち)

熊本県内ではヒタキイシ、トボシモヤシダイなどと呼びます。石の上で松根を燃やして明かりとしていました。山村では夜なべ仕事などの手元の明かりとしてに近年まで使っていたといえます。



燭台(しょくだい)

蠟燭ろうそくを立てて部屋の明かりとします。油皿を載せて灯台としても使えます。



行灯(あんどん)

油を入れた小皿に灯心を浸し、その先に火をつけて明かりとするものです。これは覆いがガラス張りなので、明治以降に使われていたものと考えられます。



提灯(ちょうちん)

木の骨組みに紙を貼った形の提灯です。中に蠟燭を立て、部屋の明かりとして、また夜道の明かりとして使っていました。



提 灯 (ちょうちん)

このような形の提灯を弓張り提灯といいます。竹の弓で上下を引っ張っています。手に持つことも吊り下げることにも下に置くこともできます。



強 盗 (がんどう)

夜の外出での明かりとして、また薄暗い雨の日の明かりとして使っていました。中の輪が回転して、どのように持っても蠟燭がまっすぐ立つようになっています。



カ ン テ ラ

カンテラとはポルトガル語で燭台のことです。中の容器に石油を入れ木綿紐に火を灯します。江戸時代の終わりころから屋内外で使われました。



ランプ

幕末から明治にかけて外国からもたらされた、石油を使う室内用照明具です。ガラスのホヤは煤けて汚れやすく、毎日の掃除が欠かせませんでした。

4 お買い物は籠を持って



魚籠を持って朝市で買い物 八代市日奈久町 1967年 白石巖撮影

買い物も昔と今ではずいぶん変わりました。今はスーパーマーケットで好きな品物を一人で選んでレジでお金を払います。肉でも魚でも重さと値段が書かれたシールが貼ってあります。昔はお店や行商の人と話ながら、その場で重さや量をはかってもらい買い物をしました。

ところで、「マイバッグ運動」ってご存じですか？ 買い物に行ったときに自分の袋や鞆に買った物を入れて、レジ袋をもらわないという運動です。少しでも地球環境に優しい、エコロジカルな暮らしがいいですね。

今なら野菜でも肉でも魚でも、プラスチックのトレイに乗り、ラップで包装されています。ちょっと昔はその場で重さをはかって八百屋さんの包装紙は新聞紙。お肉屋さんは竹の皮で肉を包んでくれました。レジ袋なんてありませんからマイバッグは当たり前。

昔の暮らしは大変でした。便利なことはみんな大好きです。でも、昔の暮らしを見直して、今の暮らしを改めた方が良いところもたくさんあるかもしれません。



枡（ます）

穀物や粉類、液体などの分量をはかる道具です。基準となるのは一升（約1.8 匁）枡で、その10分の1が一合枡です。写真は大きい方から一升枡、五合枡、二合五勺枡、一合枡です。



斗枡と斗棒（とますととぼう）

斗枡は一斗（約18 匁）をはかる用具です。かつては角形でしたが、大正時代よりこのような丸い桶型のものが作られました。

斗棒は斗枡上の余分な盛り上がり搔き均す道具です。県内ではトボと呼ばれます。男性は88歳になると斗棒を作って配り長寿を祝う風習がありました。



棹秤（さおばかり）

熊本県内ではチキリとよばれます。棹秤は槌子の原理を用いて物の重さをはかる道具です。貴金属などをはかる小型のものから米俵などをはかる大型のものまで各種ありました。魚などをはかる受け皿を吊したものもありました。



台秤（だいばかり）

荷台に物をのせて重量をはかる道具で、バネを利用して針で重量を表示するようになっています。この台秤は昭和32年に製造されたもので、目盛りが匁・貫で表示されています。日本が完全にメートル法に切り替わったのは昭和34年のことです。



買い物籠（かいものかご）

竹製の四角い蓋付きの籠は戦前から使われていたもので、豆腐などを買うときに用いられていました。藤製およびビニールを巻いた針金で編んだものは昭和30～40年代に使われていました。

5 暮らしを彩る伝統行事

電気、ガス、水道が普及する以前の暮らしは何をするにも力がいり、時間がかかる大変なものでした。そのような日々、暮らしのアクセントとなるのが正月や盆などの年中行事でした。正月や盆は一族が集まり餅や白米、普段は食べないような様々なご馳走を食べる楽しい日でした。年中行事という言葉は家族やムラなどの集団の中で年々同じ時期に同じ内容で繰り返し行う伝承行事という意味で使っていますが、元々は宮中の行事を指す言葉でした。古くは民間ではこれらの行事の日をオリメ、フシメと呼んでいたようです。これらの日は元々は豊作や、一族やムラの繁栄を願って神に対してお籠もりをするという意味の行事で、年中行事に登場するご馳走も本来は神様に供えたものをみんなで分けて食べるという意味合いがありました。しだいに、仕事が休みの日、楽しみの日という意味合いが強くなりますが、今でも県内各地で様々な年中行事が行われています。

正月

サワギ



サワギ 天草市五和町 2007年撮影

歳神への供物を掛けつらねたこのような正月の飾りは、県下では天草地方と葦北地方の鹿児島県境付近で行われています。これを天草地方では「サワギ」「シャーギ」、葦北では「オオバンザオ」と呼んでいます。

天草市五和町御領ではサワギは暮れから七日正月まで土間に飾ります。今は土間のある家が少なくなり、写真のように表に飾るところもあります。

竿にはカシの木を使います。

カシは寒中に切ると葉が落ちず、ずっと青々としているので縁起がよいといわれています。堅い材質ですので、飾った後は鎌や鍬などの柄にしていました。竿には家でとれた野菜などを掛けます。ここでは稲穂・コッパ・甘藷・大根・ツクネイモ・人参・白菜を飾っています。中央に鍬と股鍬を刃を重ね合わせてつるし、刃の上に白紙・コンブ・モロヘゴ(ウラジロ)・クマザサ・ツンノハ(ユズリハ)を重ね、その上に二段の餅とお神酒を置いています。餅には梅の枝を挿し、橙をのせています。

サワギの下にはモチバナといって俵に餅をつけた竹の枝を挿したのも飾ります。このモチバナは稲の穂を表しています。初雷が鳴ったときにこの餅をとって食べると風邪を引かない、腹痛にならないといわれています。



オオバンザオ 水俣市 2007年撮影

シュンナメジヨ

球磨地方で小正月に豊年を願い床の間に飾るものです。球磨郡相良村永江では1月14日をジウヨッカドシといい、その日の夜、家族そろってシュンナメジヨを作り床の間に飾ります。朮の入った4斗カマスにコーカ（ネム）の木で作った人形、同じくコーカの木で作ったアワボ、エノキの枝に紅白の餅をつけたものを挿します。垂れたエノキの枝は稲穂を表しています。また、コーカの木で猿の顔をしたヤジロベエも作り飾ります。

人形は着物の袖が短いのが男性、長いのが女性です。数が多いほど田植えの手伝いにたくさんきてもらえと言われていています。着物には犁や鋤、馬鋤などの農機具や蓑、笠、稲穂や野菜、農作業の風景などを描きます。

シュンナメジヨは18日の晩におろします。餅は枝からはずしておかゆにして食べ、餅以外は家のそばの荒神さんにあげます。



シュンナメジヨ 球磨郡相良村 2007年撮影

ウマウリの馬・ウマツクリの馬

小正月には扮装した若者や子どもが歳神の代わりに家々を訪れる行事が全国的に行われています。有名なものに秋田県のナマハゲがありますが、他にも中国地方のホトホト・トヘトヘ、東北や九州のカセドリなどが知られています。

菊池市龍門の中片地区のウマウリ行事では訪れるのは男の子たちです。14日の晩に集落の各家を廻り、「ウマウリに来ました」と言って授け物の藁の馬をお盆に載せて渡し、お菓子や餅、ミカンなどをもらいます。馬は農作業に欠かせない大切な家畜で、その馬の無病息災や豊作を願う気持ちが込められています。家ではもらった馬を神棚や床の間に飾り、節分の日に川に流したり、梅やミカンの木に掛けて実が成るよう祈ったりします。子どもたちが帰る時に若者が物陰から突然水を浴びせかけます。この水は清めや祝いの意味があるのですが、冬の寒い時期でもあり子どもたちは水を掛けられまいと一斉に逃げ出します。



ウマウリの馬 菊池市 2008年撮影

菊池市七城町亀尾の前川地区のウマツクリ行事は小正月ではなく正月7日の内に行われました。訪れるのは男の子たちで、家々から藁を集めて馬を作り、大根に松竹梅の枝を挿したものと一緒に盆に載せて、集落の牛馬を飼っている家に配りました。現在は正月2日に大人も一緒に作り、集落各戸に配ります。馬が啜えている縄はゼンナイ（銭縄）といって銭の孔に通して束にするもので、お金が貯まるようにという意味が込められています。この馬は神棚に飾った後、梅の木に掛けて実りがよくなるよう祈ります。



ウマツクリの馬 菊池市七城町 2008年撮影

八月十五夜

昔の暦で8月15日の夜の月は「十五夜」「中秋の名月」「芋名月」などと呼ばれます。一年で最も美しい満月だといわれ、この月にススキや団子を供え、月を眺めることを「お月見」といいます。

熊本ではゆでた里芋やカライモ、季節の野菜、果物などを枡に入れて箕にのせ、秋の草花やお酒と一緒に庭に置いた臼の上や縁側に供えるという形が多いようです。お月見には里芋がとれたことを祝うという意味もあるといわれています。

お供えものを盗む

十五夜の晩にはよその畑の野菜や庭の果物をとったり、お供えものを勝手にとって食べたりしても怒られないといったならわしが全国にあります。県内でもイモヌスミ・イモモライ・イモアゲなどといって、子どもたちがお供えしているものを貰いに来たり、あるいは家の人にだまって勝手にとって食べるという風習がありました。十五夜のお供えものを盗まれてもそれはお月様が食べたのだからかまわない、むしろその方が縁起がいい、豊作になるといって喜ぶところもあります。この夜の子どもは月からのお使い、神様であり、家に来た神様をもてなすことで豊



熊本市内のお月見のお供え物（復元）

作や幸せをお願いしていたのではないかと考えられています。

十五夜綱引き

県の南部では八月十五夜の晩に綱引きをするところがあります。綱引きの勝負により豊作豊漁を占ったり、健康を祈願したりしています。また、勝敗にはこだわらずに行っているところも多くあります。綱引きの綱の一部を持ち帰り、柿の木に巻きつけると実がたくさん成るといった話も聞かれます。

綱を引く前に綱を大きな蛇がとぐろを巻いているように巻くところもあります。これは蛇もしくは竜を表しているといわれています。綱で竜を作り子どもたちが家々をまわるといいう行事を行う所もあります。蛇や竜は水の神様を表し、その神様に豊作や健康を祈るのだと考えられています。

十五夜綱引きとあわせて、綱引きで使った綱を土俵にして相撲をとるといいう所も多くあります。



イモヌスミ 熊本市 1993年白石巖撮影



竜をかたどった綱引きの綱 上天草市 2005年撮影

カワマツリ

田植えが終わった頃から夏の土用にかけて、県内各地の水辺では竹にカケグリという竹で作った御神酒入れとキュウリなどの夏野菜、素麺、煎餅、魚の干物、藁で作った飾り物などを下げたものが見られます。これはカワマツリと呼ばれる行事の供え物です。カッパが水遊びをする子どもに悪さをしないよう、カッパの好物を供えて祈るといいう所が多いようです。



分田の供え物 2006年撮影



吉田の供え物 2006年撮影

上益城郡甲佐町吉田のカワマツリは7月初旬の日曜日に行われます。麦藁のつくり物は「ガワツパ」といってカッパの姿を現しているという人もいます。竹筒にお酒を入れ、竹の先端にはキュウリを突き刺し、地区内2か所の水路脇に立てます。

山鹿市鹿本町分田のカワマツリは毎年7月20日に行われ

ます。麦藁と竹で角だるを作り、沢に竹でつり下げます。この「オタル」にはキュウリとナスの輪切りも供えられています。竹の先端には米・塩・いりこを半紙に包んで挟み込みます。子どもたちの水難事故防止と田の水が不足しないように祈ります。

下益城郡美里町越早津のカワまつりは土用三日目近くの日曜日に行われます。稲藁のつくり物は「タコ」と呼ばれ、名水（みょうじ）水源の水神様にお供えします。お祭りにカッパは登場しませんが、このあたりにはカッパにまつわる



越早津の供え物 2006年撮影



上古閑の供え物 2006年撮影

話がたくさん伝わっています。この日配られるお米とトビウオの干物を三角形の袋に入れて溺れないためのお守りにしています。

宇土市岩古曾町上古閑のカワまつりは田植えの終わる6月下旬から7月上旬ころ（現在は7月の第一日曜日）に行われています。麦藁で作られた物は「フネ」と「タル」といいます。フネにカッパの好きなキュウリとナスやトマトなどの野菜をのせ、お酒を入れる竹筒と一緒に溜め池の縁に立てます。このため池にはカッパが住んでいるといわれ、ここで遊ぶ子どもたちを溺れさせないように願います。

5 展示資料一覧

1 ご飯を炊くの大変だ

台所今昔

(法量の単位：cm)

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
羽釜	ハガマ	八代市鏡町上鏡	22.5×22.5×15.3	
火吹き竹	ヒオコシダケ フュジダケ	熊本県内	3×3×61	
七輪	シチリン	山鹿市鹿央町持松	26×26×23	
弦鍋	エナベ	玉名市横島町横島	33×36.5×40	昭和20～30年代
自在鉤	ジザイカギ ジゼカギ	球磨郡水上村湯山	5×32.5×97.5	
焙烙	ハウロク ハウラク	熊本市池田町	35.5×35.5×5.5	
飯櫃	オヒツ、メシビツ	玉名市天水町部田見	27×27×15.5	昭和初期
飯櫃入れ	メシビツイレ、ヒツム口	玉名市天水町部田見	34.5×34.5×23.5	昭和初期
飯籠	ツリショウケ カケジョウケ エッケジョウケ	玉名市横島町横島	40×40×30	大正後期～昭和30年代
箱膳	ハコゼン	八代市	28×28×17	
ちゃぶ台	チャブダイ	熊本市	73.5×73.5×25	個人蔵
弁当箱	ベントウバコ	熊本市	7.5×12×8.5	個人蔵
弁当箱	メンツ ワリゴ	阿蘇市波野大字波野	20×11.5×80	明治期～大正期
提重箱	ワルゴ、サジキベントウ、ジュウニンベントウ	玉名市岱明町開田	17.5×26.3×39.5	大正13年～
水筒	タカンポ ヨギリ	球磨郡球磨村神瀬	9.5×9.5×30	昭和20年～昭和25年

食品の保存と加工

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
石臼	イシウス	阿蘇郡西原村小森	52×26×29	明治～大正まで
豆腐箱	トウフバコ	山鹿市鹿北町芋生	43.7×34×20	明治～昭和中期まで
甕	カメ	熊本県内	58×58×80	
醤油籠	ショユスノコ、ショユメゴ、ショイカゴ	上益城郡山都町鎌野	28×28×66	明治期～
醤油を混ぜる棒	ショユカキ マゼボウ	阿蘇市三久保	16×12×75	大正期
醤油絞り器	ショユシボリフネ、シボリキ	玉名郡南関町関下	69.5×52×32	大正～昭和期。隣組5, 6軒で共同で使用。
醤油瓶	ショユツボ、ショユガメ	山鹿市鹿央町合里	34×35×38.5	明治～昭和初期まで
芋切機	カライモキリ、コツパキリ	八代市坂本町久多良木	51×43×46.5	

2 洗濯は井戸端で

洗い場

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
井戸の滑車	クルマキ、ミズアゲカッサ	熊本市梶尾町	34×33.5×91	墨書「昭和貳拾六年九月 辻増平作」
釣瓶桶	ツルベオケ	阿蘇市西町	22×24×21	昭和18年～昭和25年
洗濯板	センタクイタ	熊本市稗田町	53.3×27×1.6	
盥	タライ	熊本県内	62.8×62.5×25	
洗濯機	センタツキ	広島県庄原市	41×48×90.5	昭和33年製

服装の変遷と裁縫

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
宮参りの着物	ミヤマイリギモノ	八代市	身丈66 桁42	
仕事着	シゴトギ ハンギリ	玉名市横島町横島	身丈86 桁67	
裁縫箱	サイホウバコ	熊本市大江	19.6×32×26	明治期
へら台		宮崎県日南市	38.5×171×4	
物差し	クジラジャク	八代市鏡町上鏡	1.8×37.8×2	鯨一尺定規。35cmまでの目盛りもついている。
火熨斗	ヒノシ	八代市東陽町河俣	38×11.5×7	明治末～昭和初期
焼鏝	ヤキゴテ、ノシゴテ	八代市出町	35×3.1×3	昭和30年代まで使用
炭火アイロン	ヒノシ、アイロン	玉名郡南関町関町	17.5×9.4×16.5	大正～昭和初期
電気アイロン	アイロン	熊本市琴平本町	19.8×10.3×12	ナショナル電気アイロン。箱書き「昭和参拾七年」
足踏みミシン	ミシン	熊本市新大江	44×121×78	シンガー社製

3 もっと暖かく もっと明るく

暖房器具の移り変わり

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
火鉢	ヒバチ	熊本県内	46×46×29	
炭櫃	スミタゴ	玉名市横島町横島	23.5×30×40	大正初期～昭和30年頃
十能	ジュウノウ	八代市鏡町上鏡	15.5×21.5×53	
火消し壺	ヒケシツボ	山鹿市鹿央町持松	25.5×25.5×21.5	
行火	コタツ、アンカ	熊本市大江	13.3×22×16.8	
湯湯婆	ユタンポ	八代市鏡町上鏡	30×22.5×11	ブリキ製
湯湯婆	ユタンポ	熊本市大江	25.8×10×12	陶器製
電気行火	アンカ	八代市鏡町上鏡	17×25.2×15	

照明器具の移り変わり

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
ひで鉢	ヒタキシ、トボシモヤシダイ	阿蘇郡西原村小森	17.5×18.5×23.5	明治期
燭台	ロウソクタテ ショクダイ	八代市鏡町上鏡	22.5×22.5×74	
行灯	アンドン	八代市鏡町上鏡	29×29×93	
提灯	コトボシ、アンドン	葦北郡津奈木町岩城	19.2×19.2×43.8	昭和25年ころまで
提灯	ユミハリチョウチン チョウチン	天草市牛深町牛深	25×25×48	
強盗	ガンドウ	八代市鏡町上鏡	24×24×34	
カンテラ	カンテラ	下益城郡富合町清藤	13×13×31	
ランプ	ランプ	宇城市小川町北新田	8×8×26.5	明治期

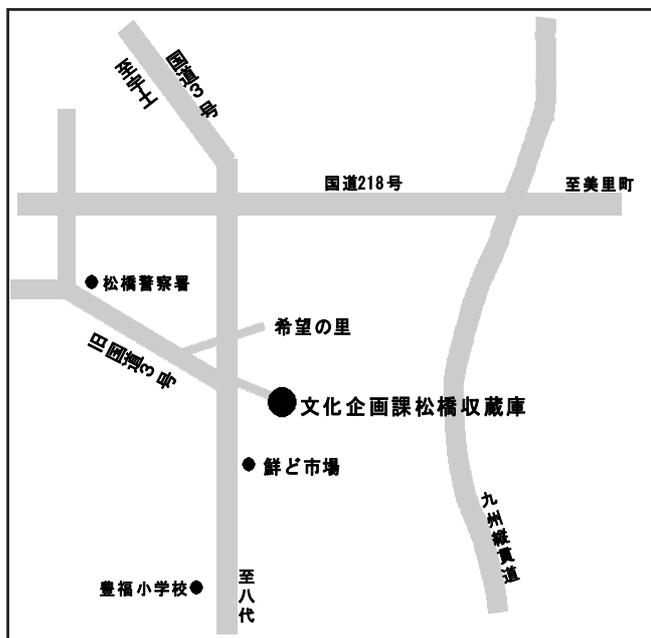
4 お買い物は籠を持って

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
買い物籠	カイモンカゴ	八代市鏡町上鏡	29×29×28	竹製
買い物籠		福岡県福岡市	25×32×36	ビニール製
買い物籠	カイモノカゴ	熊本市新大江	21×34.5×35.5	籐製
斗枡	トマス イットマス	熊本市小山町	35×47×18	昭和40年代まで
枡	マス	合志市須屋		一升枡、五合枡、二合五勺枡、一合枡 昭和初期～昭和30年代
棹秤	チキリ サオハカリ	上益城郡甲佐町豊内	長さ62.2	大正期～昭和期
台秤	ダイバカリ	宮崎県日南市	25.5×21×28	昭和32年製

5 暮らしを彩る伝統行事

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
サワギ		天草市五和町御領		2007年
シュンナメジヨ		球磨郡相良村川辺		2007年
ウマウリノウマ		菊池市龍門		2008年
ウマツクリノウマ		菊池市七城町亀尾		2008年
お月見の供え物				熊本市の供え物を写真から復元
カワマツリの供え物(ガツハ)		上益城郡甲佐町吉田		2006年
カワマツリの供え物(フネ、タル)		宇土市岩古曾町上古閑		2006年
カワマツリの供え物(オ刈)		山鹿市鹿本町分田		2006年
カワマツリの供え物ノ(知)		下益城郡美里町越早水		2006年

[文化企画課松橋収蔵庫のご案内]



所在地：宇城市松橋町豊福 1695

電話：(0964) 34 - 3301

Fax：(0964) 34 - 3302

平成20年度文化企画課松橋収蔵庫第2回企画展

「ちょっと昔のくらし探検」

編集・発行 熊本県地域振興部文化企画課
熊本市水前寺 6 - 18 - 1
(096)333-2155

発行日 平成20年12月1日

20 地文企
⑥ 001